

対する評価と課題

広瀬 会里¹, 曾田 陽子², 飯島佐知子³, 深田 順子⁴, 片岡 純¹, 百瀬由美子⁵,
古田加代子⁶, 山口 桂子⁷

Issues and Evaluation of Nursing Skill Practice Before Graduation

Eri Hirose¹, Yoko Sota², Sachiko Iijima³, Junko Fukada⁴, Jun Kataoka¹, Yumiko Momose⁵,
Kayoko Furuta⁶, Keiko Yamaguchi⁷

- 【目的】看護実践能力向上に向けて、4年次のカリキュラムに全看護学領域の教員が縦断的にかかわる少人数教育の科目「看護学演習ⅡB」を設けた。これに対する学生評価を明らかにする。
- 【方法】研究倫理審査委員会で承認を得て、静脈血採血、注射の準備、輸液中の臥床患者の寝衣交換の演習終了後に演習方法、演習内容、到達度の合計13項目（寝衣交換は12項目）について4段階尺度で質問紙調査をした。
- 【結果】静脈血採血と注射の準備は13項目、寝衣交換では8項目において90%以上の学生が高い評価をした。自由記載では「実施できてよかった」「指導方法がよい」「もっと練習したい」という要望があった。
- 【考察】方法、内容、到達度が全て高い評価であり卒業前の演習として適切であった。また、「すぐに聞けるのがよい」と少人数教育の効果が表れていた。今後は多領域の教員がかかわるため指導要領の充実、反復練習できる環境整備を検討していく。

キーワード：看護実践能力、看護技術演習、卒業前、学生自己評価

I. 序 論

質の高い看護ケアを提供するには高度な看護実践能力が求められる。しかし、人権に対する配慮や医療における安全確保の点から看護師の資格を持たない学生の臨地実習での看護技術の実践の機会は狭められている。このことから新卒看護師に求められている看護実践能力と卒業時の学生の能力との乖離が大きくなっていることが指摘されている¹⁾。本学では、卒業生の就職先の病院、卒業生への看護技術に関する調査をもとに、学内での演習内容の見直しを図った。そして看護学演習Ⅰ・Ⅱを2003年度から開始されたカリキュラムの中に位置づけ、看護学演習Ⅰは3年後期の実習終了後に、看護学演習Ⅱは4年後期に開講した。この演習は少人数教育の方法を取り入れ、全看護学領域の教員が縦断的に関わることで学生

の看護実践能力習得を効果的に図ろうとするところを特徴とし、これまで演習内容や方法、および教員の技術教育能力の向上について検討を重ねてきた。

看護学演習Ⅱの教育目標は「基礎的な看護実践能力の修得を図る」ことである。看護学演習Ⅱは看護学演習ⅡAとⅡBに大別され、看護学演習ⅡAでは「様々な看護領域の特殊性をふまえ、その領域における看護実践能力として備えるべき基本的能力の修得」を教育目標とし、学生が3つの教育内容から選択して履修できるよう準備されている。

看護学演習ⅡBでは基礎的な看護技術の習熟を目標として、生活行動の援助技術、診療に伴う援助技術の中から演習項目を選び、少人数制による技術演習を行う。平成20年度は、静脈血採血、注射の準備、輸液をしている臥床患者の寝衣交換を演習項目として行った。

本研究では、看護学演習ⅡBに対する学生評価を行い、

¹愛知県立大学看護学部（成人慢性期看護学）、²愛知県立大学看護学部（基礎看護学）、³前愛知県立大学看護学部（看護管理学）、⁴愛知県立大学看護学部（成人急性期看護学）、⁵愛知県立大学看護学部（老年看護学）、⁶愛知県立大学看護学部（地域看護学）、⁷愛知県立大学看護学部（小児看護学）

その結果から演習の実施方法について検討したことを報告する。

II. 目 的

現行カリキュラムの看護学演習ⅡBに対する学生の評価を明らかにし、看護学演習ⅡBの課題を検討することを目的とする。

III. 方 法

1. 演習内容および演習方法

1) 静脈血採血

1) 演習方法

演習は4年生1グループ4～5名(合計77名)に対して教員1名配置(基礎, 老年, 地域, 管理看護学領域の教員合計18名)で実施した。1回目の演習では上腕モデルによる採血, 各学生の血管の走行の確認の順に実施した。2回目演習の前に練習日を2回設け十分な教員配置の上で1回目演習の内容が復習できるようにした。2回目演習では学生は採血者と被採血の順番を決め, キャップをした状態で一連の動作の練習したのちに学生同士で実際に人体からの採血を実施した。実施した内容は学生同士で「技術確認表」を用いて自己評価と他者評価をした。また, 例年, 人体からの採血演習時には気分不快を訴える学生が1～2名あることや, 針刺し事故発生時の迅速な対応体制として, 今年度からは校医が立ち会いのもと採血演習を実施した。

2) 注射の準備

4年生1グループ5～7名(合計77名)に対して教員1名配置(小児, 精神, 母性看護学領域の教員合計13名)で実施した。内容は注射の準備として課題1「ビタミン剤2mLアンプルから1mLを吸い上げる」, 課題2「ビタミン剤1バイアルを生理食塩水3mLで溶解して吸い上げる」, 課題3「ビタミン剤2mLアンプルから0.5mL吸い上げる」について教員によるデモンストレーションの後, 学生は2人1組となって繰り返し練習する時間を設けた。

3) 輸液をしている臥床患者の寝衣交換

1回目演習は4年生1グループ5～6名(合計77名)に対して教員1名配置(基礎, 成人看護学領域の教員合計16名)で実施した。学生は事例「肝硬変で腹水が貯留

している患者」に基づいた寝衣交換の計画立案を行い, 教員よりフィードバックを個別にうけた。教員は計画立案のチェックシートを用いて学生に対し, 病態を踏まえた寝衣交換時のリスクと対処方法および寝衣交換の実施手順について助言した。指導する際には指導要項(実施計画書チェックリスト)を用い教員間の指導の統一を図った。2回目演習では, 腹水にみたてた氷枕と滴下調整ができるドリップ君[®]を装着した患者役の学生に対して学生一人ずつ寝衣交換を実施し, 教員は「寝衣交換評価表」をもとに学生にコメントを個別に返した。

2. 調査方法

看護学演習ⅡBを受講した2005年度生(4年次生)77名に対する質問紙調査を実施した。静脈血採血, 注射の準備, 輸液をしている臥床患者の寝衣交換に関する演習項目それぞれの演習前あるいは終了後に, 調査の目的, 方法について学生に文書と口頭で説明し, 調査票を配布し, 各演習の終了時に設置した所定の箱に入れてもらって回収した。

3. 調査内容

①静脈血採血, ②注射の準備, ③輸液をしている臥床患者の寝衣交換(計画立案・実施)に関する演習項目それぞれについて, 調査票を作成した。①静脈血採血, ②注射の準備については, 演習方法7項目, 演習内容3項目, 演習での到達度3項目, 合計13項目を調査項目とした。具体的には, 演習方法は「1. 授業時間」「2. 説明時間と練習時間のバランス」「3. 演習の進み方」「4. デモンストレーションの長さ」「5. デモンストレーションのわかりやすさ」「6. 指導のタイミング」「7. 必要性や方向性がわかる指導」とした。演習内容は「8. 演習の難易度」「9. 学んだ知識との関連」「10. この時期に実施する意義」とした。演習での到達度は「11. 教員の監視下での実施」「12. 今後実施する上での自信」「13. 卒業後実施する上で役立つ」とした。

③輸液をしている臥床患者の寝衣交換については, 寝衣交換の計画立案の演習と, 寝衣交換の実施の演習それぞれについて評価する調査票を作成した。寝衣交換の計画立案の演習に関する調査項目は, 演習方法4項目, 演習内容3項目(静脈血採血・注射の準備と同じ調査項目), 演習での到達度3項目, 合計10項目を調査項目とした。具体的には, 演習方法は「1. 授業時間」「2. 演習の進み方」「3. 教員のアドバイスと指導のタイミング」「4.

必要性や方向性がわかる指導」とした。演習での到達度は「8. 実施方法のイメージ化につながる」「9. 今後実施する上での自信」「10. 卒業後実施する上で役立つ」とした。寝衣交換の実施の演習に関する調査項目は、演習方法4項目、演習内容3項目、演習での到達度3項目、合計10項目であり、寝衣交換の計画立案に関する調査項目「8. 実施方法のイメージ化につながる」を「8. 教員の監視下での実施」に変更して評価した。

各項目は、「4：非常に当てはまる」「3：大体当てはまる」「2：あまり当てはまらない」「1：全く当てはまらない」の4段階尺度で評価された。

また、演習に関する意見の自由記載欄を設けた。

4. 分析方法

尺度とした「非常に当てはまる」を4点、「大体当てはまる」を3点、「あまり当てはまらない」を2点、「全く当てはまらない」を1点として、Likert尺度構成法的に頻度に応じて尺度値をあてはめ統計処理した。各項目の平均、標準偏差、度数分布を求めた。統計処理には統計解析用ソフトSPSS (Ver. 16.0 for Windows) を使用した。

自由記載は類似した内容ごとにカテゴリー化した。

5. 倫理的手続き

本調査の実施については、2007年9月愛知県立看護大学研究倫理審査委員会で承認(19愛看大第148号)を受けた。調査票はあらかじめ学生に了解を得て配布した。調査票配布時に、調査の目的、方法、調査への協力は自由意思によること、調査結果は調査目的以外に使用しないこと、学会や専門雑誌にて公表されるが個人を特定できるような情報は一切公表しないこと、回収をもって同意とすることを文書と口頭で学生に説明を行った。調査票は無記名とした。得られたデータは論文掲載時点でシュレッダーを用いて破棄することとした。

IV. 結 果

1. 静脈血採血法

調査票は出席者全員に配布し、配布数73件、回収数72件、回収率98.6%であった。80%以上の学生が「非常に当てはまる」と回答した項目は「演習した内容は卒業後

表1 「静脈血採血」に対する学生の評価

		mean	SD		1：全く 当てはま らない	2：あま り当ては まらない	3：大体 当てあま る	4：非常 に当ては まる	合 計	1+2	3+4
演 習 方 法	1 演習の内容に対して授業時間は適当であった	3.50	0.58	n %	0 (0.0)	3 (4.2)	30 (41.7)	39 (54.2)	72 (100.0)	3 (4.2)	69 (95.8)
	2 説明時間と練習時間のバランスはよかった	3.63	0.52	n %	0 (0.0)	1 (1.4)	25 (34.7)	46 (63.9)	72 (100.0)	1 (1.4)	71 (98.6)
	3 演習の進み方は、適当であった	3.69	0.46	n %	0 (0.0)	0 (0.0)	22 (30.6)	50 (69.4)	72 (100.0)	0 (0.0)	72 (100.0)
	4 デモンストレーションの長さは、適当であった	3.75	0.44	n %	0 (0.0)	0 (0.0)	18 (25.0)	54 (75.0)	72 (100.0)	0 (0.0)	72 (100.0)
	5 教員は、デモンストレーションをよく見えるようにわかりやすく行っていた	3.74	0.50	n %	0 (0.0)	2 (2.8)	15 (20.8)	55 (76.4)	72 (100.0)	2 (2.8)	70 (97.2)
	6 教員のアドバイス、指導のタイミングはよかった	3.75	0.44	n %	0 (0.0)	0 (0.0)	18 (25.0)	54 (75.0)	72 (100.0)	0 (0.0)	72 (100.0)
	7 教員は、学生の行っている方法の修正の必要性や方向性がわかるように指導や説明をしていた	3.78	0.42	n %	0 (0.0)	0 (0.0)	16 (22.2)	56 (77.8)	72 (100.0)	0 (0.0)	72 (100.0)
演 習 内 容	8 演習の難易度は、適当であった	3.75	0.44	n %	0 (0.0)	0 (0.0)	18 (25.0)	54 (75.0)	72 (100.0)	0 (0.0)	72 (100.0)
	9 演習は、これまで学んだ知識と関連がわかる展開であった	3.74	0.44	n %	0 (0.0)	0 (0.0)	19 (26.4)	53 (73.6)	72 (100.0)	0 (0.0)	72 (100.0)
	10 この時に実際にやってみる意義がある演習であった	3.88	0.37	n %	0 (0.0)	1 (1.4)	7 (9.7)	64 (88.9)	72 (100.0)	1 (1.4)	71 (98.6)
到 達 度	11 演習した内容は、教員の監督下で実施できるようになった	3.75	0.44	n %	0 (0.0)	0 (0.0)	18 (25.0)	54 (75.0)	72 (100.0)	0 (0.0)	72 (100.0)
	12 演習した内容を、今後実施するのに自信が持った	3.50	0.71	n %	1 (1.4)	6 (8.3)	21 (29.2)	44 (61.1)	71 (98.7)	7 (9.7)	65 (90.3)
	13 演習した内容は、卒業後に実施するのに役に立つ	3.88	0.33	n %	0 (0.0)	0 (0.0)	9 (12.5)	63 (87.5)	72 (100.0)	0 (0.0)	72 (100.0)

n = 72

表2 「静脈血採血」の自由記載 (34件)

カテゴリー	記 載 内 容
自信がついた (9件)	卒業後、実施することに対する不安は軽減したが、自信をもって実施できるようにたくさん経験して技術を高めていきたいと思う すごく自信がついた 初めて人に対しての侵襲のあるものだったので緊張した 実際に人に採血を行うことができ、自信がついた。また、看護師の責任というものを実感した。とても良い演習だったと思う 先生のサポートがあって、少し自信がついた すごく緊張したが、自信がついた 演習で安全にできてすごくうれしかった。この演習があって少し自信がついた 基礎看護で1回やっていたので復習になったし、卒業前に実際に人にやることで少し自信がついたと思う 実際に人に実施できたことで自信になった 難しかったけれどコツはつかめたような気がする
実施できてよかった (6件)	実際に在学中に採血を実施できてよかった 自分の悪かったところを振り返って、技術を定着させます まだまだわからないことだらけだが、「したことがある」という経験は、今後の練習・実施に役立っていくと思う 働き出す前に練習できてよかった 実際に言うことができ、本当によかった 実際に人に行うということで臨場感があった よかった 学校で実際にできてよかった 卒業後にいかすことができそう
もっと練習したい (7件)	もう何回か、練習と本当に実施するのはやはり違うので、できるとよかった でも、自分の中で採血の感覚はつかめた 違う人の腕でもう一度やりたい。今日注意されたことが実践できると思う 実際針入すると色々わかることがあるので、2回ぐらいできるといいなと思う 授業の時間外で練習する時間をもう少し作ってほしかった 1人の先生に4~5人ということで、指導してもらえる時間は充分にあって、とても勉強になった もっと練習したかった 実際人間に刺す演習がもう1時間あると良いと思う (違うグループで等) 本当の腕で行う演習時間がもう1回くらいあったら、もっとよかったなあって思った
指導方法が良い (3件)	練習をしてすぐに行く方法でよかった 先生に個人個人で教えてもらい、またグループで技術で注意しなければいけないところを共有できてよかった 先生の指導が分かりやすく良かったです 少人数制で1人の時間が十分とれていたのも良かった
指導方法のばらつき (4件)	指導教員によって指導内容に差がある 先生によって持ち方 (固定の仕方) などの指導が違っていたので少し混乱した 先生によってやり方やポイントが違うので、色々な先生の意見を聞いて、自分のやりやすい方法を見つけられるような環境だと思った 最初のデモンストレーションは基礎の先生が行った方がよいのではないかと感じた
緊張した (3件)	とても緊張した 緊張してしまい、落ち着いて行うことはできなかったが、先生のアドバイスのおかげで、何とか行うことができた すごく緊張したけれど、臨床でとても役立つと思った
感謝 (2件)	何もなく終わって安心した 丁寧に教えて下さってありがとうございました

に実施するのに役立つ」「この時期に実際にやってみる意義のある演習であった」であった。13項目すべての質問項目に対して90%以上の学生が「非常に当てはまる」か「大体当てはまる」と回答していた。

自由記載は、33名から34件の記載があり、「すごく緊張したが自信がついた」「実際に人に採血することができて自信がついた」「基礎看護学でやっていたので復習になったし卒業前に実際に人にやることで少し自信がついた」「先生のサポートがあって自信がついた」など演習したことにより『自信がついた』といった内容が9件、「実際に在学中に採血を実施できてよかった、自分の悪かったところを振り返って技術を定着させたい」「卒業後に生かすことができそう」など人体への採血を『実施できてよかった』とする記述が6件、「違う人の腕でもう一度やりたい、今日注意されたことが実践できるとよい」「授業の時間外で練習する時間をもう少し作って欲しかっ

た」など『もっと練習したい』とする記述が7件、「先生に個人個人で教えてもらいましたグループで技術で注意しなければいけないところを共有できてよかった」「先生の指導がわかりやすかった」とする『指導方法が良い』が3件、「指導教員によって指導内容に差がある」など『指導方法のばらつき』に関する記述が4件、「すごく緊張したけれど臨床でとても役立つと思った」など『緊張した』という記述が3件、その他に『感謝』しているといった記述が2件あった。

2. 注射の準備

質問票は出席者全員に配布し、配布数77件、回収数72件、回収率93.5%であった。

80%以上の学生が「非常に当てはまる」と回答した項目は「演習の進み方は適当であった」(80.6%)、「教員はデモンストレーションをよく見えるようにわかりやすく

行っていた」(84.7%),「教員のアドバイス、指導のタイミングはよかった」(83.3%),「教員は学生の行っている方法の修正の必要性や方向性がわかるように指導や説明をしていた」(84.7%),「演習はこれまで学んだ知識と関連がわかる展開であった」(81.9%),「この時期に実際にやってみる意義がある演習であった」(91.7%),「演習した内容は教員の監督下で実施できるようになった」(81.9%),「演習した内容は卒業後に実施するのに役に立つ」(87.5%)の8項目であった。13項目すべての質問

項目に対して90%以上の学生が「非常に当てはまる」か「大体当てはまる」と回答していた。

自由記載には10名から11件の記述があり「様々なシリンジ・針、薬液量で練習することができてよかった」、「具体的なアドバイスがもらえてよかった」など『演習方法がよかった』と評価する記述が4件、「自信がもてた」など『自信がついた』とする記述が2件、「自信につながるから大切だ」とこの『演習の意義』についての記述が1件あった。また、「一度の演習ではなく、もっと練習する

表3 「注射の準備」に対する学生の評価

n=72

注 射 の 準 備		mean	SD		1:全く 当てはま らない	2:あま り当ては まらない	3:大体 当てあま る	4:非常 に当ては まる	合 計	1+2	3+4
演 習 方 法	1 演習の内容に対して授業時間は適当であった	3.64	0.51	n %	0 (0.0)	1 (1.4)	24 (33.3)	47 (65.3)	72 (100.0)	1 (1.4)	71 (98.6)
	2 説明時間と練習時間のバランスはよかった	3.72	0.45	n %	0 (0.0)	0 (0.0)	20 (27.8)	52 (72.2)	72 (100.0)	0 (0.0)	72 (100.0)
	3 演習の進み方は、適当であった	3.81	0.40	n %	0 (0.0)	0 (0.0)	14 (19.4)	58 (80.6)	72 (100.0)	0 (0.0)	72 (100.0)
	4 デモンストレーションの長さは、適当であった	3.79	0.41	n %	0 (0.0)	0 (0.0)	15 (20.8)	57 (79.2)	72 (100.0)	0 (0.0)	72 (100.0)
	5 教員は、デモンストレーションをよく見えるようにわかりやすく行っていた	3.82	0.45	n %	0 (0.0)	2 (2.8)	8 (12.5)	61 (84.7)	72 (100.0)	2 (2.8)	70 (97.2)
	6 教員のアドバイス、指導のタイミングはよかった	3.83	0.38	n %	0 (0.0)	0 (0.0)	12 (16.7)	60 (83.3)	72 (100.0)	0 (0.0)	72 (100.0)
	7 教員は、学生の行っている方法の修正の必要性や方向性がわかるように指導や説明をしていた	3.83	0.41	n %	0 (0.0)	1 (1.4)	10 (13.9)	61 (84.7)	72 (100.0)	1 (1.4)	71 (98.6)
演 習 内 容	8 演習の難易度は、適当であった	3.79	0.41	n %	0 (0.0)	0 (0.0)	15 (20.8)	57 (79.2)	72 (100.0)	0 (0.0)	72 (100.0)
	9 演習は、これまで学んだ知識と関連がわかる展開であった	3.82	0.39	n %	0 (0.0)	0 (0.0)	13 (18.1)	59 (81.9)	72 (100.0)	0 (0.0)	72 (100.0)
	10 この時に実際にやってみる意義がある演習であった	3.92	0.28	n %	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (8.3)	66 (91.7)	72 (100.0)	0 (0.0)	72 (100.0)
到 達 度	11 演習した内容は、教員の監督下で実施できるようになった	3.81	0.43	n %	0 (0.0)	1 (1.4)	12 (16.7)	59 (81.9)	72 (100.0)	1 (1.4)	71 (98.6)
	12 演習した内容を、今後実施するのに自信がついた	3.63	0.66	n %	0 (0.0)	1 (1.4)	21 (29.2)	49 (68.1)	71 (98.7)	1 (1.4)	71 (98.6)
	13 演習した内容は、卒業後に実施するのに役に立つ	3.88	0.33	n %	0 (0.0)	0 (0.0)	9 (12.5)	63 (87.5)	72 (100.0)	0 (0.0)	72 (100.0)

表4 「注射の準備」の学生アンケートの自由記載 (11件)

カテゴリー	記 載 内 容
演習方法がよかった(4件)	様々なシリンジ・針、薬液量で練習することができてよかった シリンジの太さや薬液の吸引の指示量等、様々な用意してあってよかった 教員がそばにいて安心だった 教員から具体的なアドバイスがもらえてよかった
自信がついた(2件)	自信がもてた 基礎の時よりも上手くできた
演習の意義(1件)	自信につながるから大切だ
もっと練習したい(4件)	今後、練習する時間がほしい 一度ずつだけでなく何度か練習する機会がほしい もっと吸う時間がほしい もう少し練習する時間がほしい

時間が欲しい」など練習の機会の確保を要望し『もっと練習したい』という記述が4件あった。

3. 輸液をしている臥床患者の寝衣交換

質問票は出席者全員に配布し、配布数77件、回収数72件、回収率93.5%であった。

80%以上の学生が「非常に当てはまる」と回答した項目は無かったが、評価が高い項目は計画立案では「演習した内容は卒業後に実施するのに役立つ(77.8%)」、寝

衣交換の実施では「この時期に実際にやってみる意義のある演習であった(77.8%)」があった。計画立案に関する10項目中9つの質問項目に対して90%以上の学生が「非常に当てはまる」か「大体当てはまる」と回答し、寝衣交換の実施に関する10項目中8つの質問項目に対して90%以上の学生が「非常に当てはまる」か「大体当てはまる」と回答した。

自由記載では計画立案について13名から14件、寝衣交換の実施について16名から23件の記述があった。寝衣交

表5 「輸液中の臥床患者の寝衣交換」に対する学生の評価

n = 72

寝衣交換		mean	SD		1:全く当てはまらない	2:あまり当てはまらない	3:大体当てはまる	4:非常に当てはまる	合計	1+2	3+4	
寝衣交換の計画立案の演習	演習の内容に対して授業時間は適当であった	3.4	0.6	n %	0 (0.0)	3 (4.2)	34 (47.2)	35 (48.6)	72 (100.0)	3 (4.2)	69 (95.8)	
	演習の進み方は適当であった	3.5	0.6	n %	0 (0.0)	2 (2.8)	31 (43.1)	39 (54.2)	72 (100.0)	2 (2.8)	70 (97.2)	
	演習時の教員のアドバイス、指導のタイミングは良かった	3.5	0.6	n %	0 (0.0)	4 (5.6)	30 (41.7)	38 (52.8)	72 (100.0)	4 (5.6)	68 (94.4)	
	教員は学生の行っている方法の修正の必要性や方向性が分かるように指導や説明をしていた	3.7	0.5	n %	0 (0.0)	1 (1.4)	18 (25.0)	53 (73.6)	72 (100.0)	1 (1.4)	71 (98.6)	
	演習の難易度は適当であった	3.6	0.5	n %	0 (0.0)	1 (1.4)	26 (36.1)	45 (62.5)	72 (100.0)	1 (1.4)	71 (98.6)	
	演習はこれまで学んだ知識と関連がわかる展開であった	3.7	0.5	n %	0 (0.0)	1 (1.4)	17 (23.6)	54 (75.0)	72 (100.0)	1 (1.4)	71 (98.6)	
	この時期に実際にやってみる意義のある演習であった	3.6	0.6	n %	0 (0.0)	5 (6.9)	16 (22.2)	51 (70.8)	72 (100.0)	5 (6.9)	67 (93.1)	
	演習した内容は実施方法のイメージ化につながった	3.8	0.4	n %	0 (0.0)	0 (0.0)	18 (25.0)	54 (75.0)	72 (100.0)	0 (0.0)	72 (100.0)	
	演習した内容を今後実施するのに自信がついた	3.4	0.7	n %	0 (0.0)	8 (11.1)	29 (40.3)	35 (48.6)	72 (100.0)	8 (11.1)	64 (88.9)	
	演習した内容は卒業後に実施するのに役立つ	3.8	0.5	n %	0 (0.0)	1 (1.4)	15 (20.8)	56 (77.8)	72 (100.0)	1 (1.4)	71 (98.6)	
	寝衣交換の実施	演習の内容に対して授業時間は適当であった	3.3	0.8	n %	2 (2.8)	11 (15.3)	22 (30.6)	37 (51.4)	72 (100.0)	13 (18.1)	59 (81.9)
		演習の進み方は適当であった	3.6	0.6	n %	0 (0.0)	3 (4.2)	25 (34.7)	44 (61.1)	72 (100.0)	3 (4.2)	69 (95.8)
演習時の教員のアドバイス、指導のタイミングは良かった		3.7	0.6	n %	0 (0.0)	3 (4.2)	18 (25.0)	51 (70.8)	72 (100.0)	3 (4.2)	69 (95.8)	
教員は学生の行っている方法の修正の必要性や方向性が分かるように指導や説明をしていた		3.8	0.4	n %	0 (0.0)	0 (0.0)	17 (23.6)	55 (76.4)	72 (100.0)	0 (0.0)	72 (100.0)	
演習の難易度は適当であった		3.7	0.5	n %	0 (0.0)	1 (1.4)	18 (25.0)	53 (73.6)	72 (100.0)	1 (1.4)	71 (98.6)	
演習はこれまで学んだ知識と関連がわかる展開であった		3.8	0.4	n %	0 (0.0)	0 (0.0)	17 (23.6)	55 (76.4)	72 (100.0)	0 (0.0)	72 (100.0)	
この時期に実際にやってみる意義のある演習であった		3.8	0.5	n %	0 (0.0)	2 (2.8)	14 (19.4)	56 (77.8)	72 (100.0)	2 (2.8)	70 (97.2)	
演習した内容は教員の監督かで実施できるようになった		3.5	0.6	n %	0 (0.0)	6 (8.3)	23 (31.9)	43 (59.7)	72 (100.0)	6 (8.3)	66 (91.7)	
演習した内容を今後実施するのに自信がついた		3.4	0.7	n %	0 (0.0)	11 (15.3)	21 (29.2)	40 (55.6)	72 (100.0)	11 (15.3)	61 (84.7)	
演習した内容は卒業後に実施するのに役立つ		3.8	0.5	n %	0 (0.0)	1 (1.4)	16 (22.2)	55 (76.4)	72 (100.0)	1 (1.4)	71 (98.6)	

換の計画立案では「教員に共通の指導案がありもれなく指導が受けられるのは良い」「個別に教員がコメントしてくれて計画立案時に出た疑問が解決」など、『指導が良い』が3件、「病態からリスクを考えて計画を立てる必要がわかった」など『演習の意義』を実感した記述が3件、「修正した後も計画を見てほしかった」「アドバイスはもっと早い時期が良い、練習が十分にできない」など『演習スケジュール』への要望が6件、「教員によって計画が違う」など『指導方法』に関する記述が2件あった。寝衣交換の実施では「練習中にやりにくいと思っていたところが解決できた」など『演習の意義』を実感した記述が3件、「難しい事例で実施できたのでよかった、現場に

出てはじめてやると緊張するが今練習できたので少し自信がついた」など『自信がついた』という記述が2件、「もう一度確認できてよかった」という『実施できてよかった』とする記述が3件、「アドバイスがとてもわかりやすく実際に実施して教えてもらえたのでとてもよかった」「自分の気がつかない癖などを指摘して頂けて良かった」という『指導方法が良い』という記述が4件、「授業時間が足りない」など『もっと演習したい』という積極的な意見が9件、「4年後期ではちょっと時期が遅い感じがした」とい『時期が遅い』とする記述が1件、「あまり習得できた感じがしない」という『習得できていない』とする記述が1件あった。

表6 「輸液中の臥床患者の寝衣交換」の計画立案及び実施の学生アンケートの自由記述 (37件)

演習内容	カテゴリー	記述内容
寝衣交換の計画立案	指導が良い (3件)	教員のアドバイスで、修正がわかりやすくてできた 教員に共通の指導案があり、もれなく指導が受けられるのはよい 個別に教員がコメントしてくれて、計画立案時に出た疑問などが解決でき、とてもよかった
	演習の意義 (3件)	とてもむずかしかったが勉強になった。病態からリスクを考えて計画を立てる必要がわかった 教科書通りにはいかないことが分かった。患者にとって一番安楽な方法を常に工夫していくことが必要だと思った 今まで実習で寝衣交換をやってきたが、ここまで計画を立てて行うことはなく、1つの看護技術を提供するだけでもここまで観察項目や気をつける点があって計画を立てるのが大変だった
	演習スケジュール (6件)	実施方法を修正した後も、計画をみてほしかった (2名) アドバイスはもっと早い時期が良いと思う。練習が十分出来ない (2名) 輸液中の患者の寝衣交換は3年後期～4年前期の病院実習で困った経験があるので、もっと早い時期に演習を行いたかった (2名)
	指導方法 (2件)	教員によって計画が違う。学生が情報交換して混乱したので、指導内容を統一できればいい。 計画をどの程度書くのか明確でないのが困った (当たり前の手順、ボディメカニクスなど)
寝衣交換の実施	演習の意義 (3件)	練習中にやりにくいと思っていたところが解決できた。 細かく指導してもらえたのでよかった。自分一人では思いつかなかったいろいろな方法をみることで勉強になった 勉強になった、とても楽しい演習だった
	自信がついた (2件)	難しい事例で実施できたので、よかった。現場に出て初めてやるともっと緊張するが、今練習出来たので少し自信がついた 点滴をしている患者の寝衣交換について、今回演習をして、どのようにして行えばよいかをイメージしやすくなった。少しだけだけど、「できる」という自信がついた。
	実施できてよかった (3件)	もう一度、確認できてよかった 計画しても実施時に忘れてしまったこともあったので、完璧にやれたらよかったと思う。就職したら、こんなにじっくり計画できないと思うのでやれてよかった 頭でわかっているのと実際にできるのとはやっぱり違うので、もっと練習して体で覚えることが大切だと思った
	指導方法が良い (4件)	実施時間の設定は適切だったと思う。チェックリストがあるのでフィードバックの時間は短くても有効に使えるようになっていて感じた アドバイスがとてもわかりやすく、実際に実施して教えてもらえたので、とてもよかった 細かく指導してもらえたのでよかった 自分の気がつかないクセなどを指摘して頂けてよかった
	もっと演習したい (9件)	授業時間が足りない。2コマは必要である 時間が13分と限られていたと思うようにできなかった 患者は意識レベルが低いことになっているが、学生が演じると元気で協力的な状態であることや、和式寝衣以外での状況だとどうすればよいのかという点も併せて学べるとうい もう一度くらい演習がしたい 計画・実践・修正まで演習したかった もっと練習できる時間がほしかったです (教員の指導のもとで) 実習に行く前にもっとやりたかった (2名)
	時期が遅い (1件)	4年後期では、ちょっと時期が遅い感じがした
	習得できていない (1件)	あまり、習得できた感じがしない

V. 考 察

看護学演習ⅡBの静脈血採血、注射の準備、輸液をしている臥床患者の寝衣交換のいずれにおいても演習の時間、進み方、教員の指導について9割以上の学生が「大体当てはまる」「非常に当てはまる」と高い評価をしており、実施方法は適切であったと評価できる。教員のアドバイスの内容やタイミングは、静脈採血、注射の準備で72名(100%)、寝衣交換で69名(95.8%)がよかったと評価しており、自由記載には「教員のアドバイスが良かった」「すぐに聞けるのが良い」「教員がそばにいて安心だった」などが多数あった。これは学生個々の技能に合わせたきめ細やかな指導がタイミングよく行われたことに対する評価と考える。しかし多領域の教員が多数関与することで生じる細かな点での指導の相違に対しては「指導内容を統一してほしい」といった学生の声が聞かれた。各教員の専門領域が異なるため、細部では統一されないところもあると考えられるが、学生が混乱を起さぬように指導要領の充実や、更なる教員の指導方法の向上も求められていると考える。

演習内容の難易度、演習の展開、意義、技術の到達度については、すべての演習で9割以上の学生が「大体当てはまる」「非常に当てはまる」と回答しており、演習内容および到達度は適切であったと評価できる。静脈血採血や注射の準備の自由記載では「基礎看護学でやっていたので復習になったし卒業前に実際に人にやることで少し自信がついた」や「様々なシリンジ・針、薬液量で練習することができてよかった」などがあつた。採血や注射は就職後に早かれ遅かれ実施が求められる技術であるが、2年前期で学習して以来実施する機会がなく、学生にとっては実施に不安を感じる技術であると考えられる。これを卒業前に再学習し技術の習熟が確認できたことは、学生の不安に対応した演習であったといえる。輸液をしている臥床患者の寝衣交換では「病態からリスクを考えて計画を立てる必要がわかった」「難しい事例で実施できたのでよかった。現場に出て初めてやるともっと緊張するが、今練習できたので少し自信がついた」など、肝性脳症、呼吸困難、腹水、倦怠感があり寝衣交換が難しい事例であるが、それに取り組む意義と必要性を理解してこの演習に臨んでいることから、この時期にこの難易度の演習を行う意義が見出せた。看護学演習ⅡBが開講される前と後の卒業生への調査²⁾では、静脈血採血、輸

液ラインの取り扱い、輸液中の臥床患者の寝衣交換の技術において未受講者と受講者とを比較すると、自信を持ってできたと回答した学生は各々42.8%から54.5%、35.7%から54.6%、64.3%から68.2%へと増加した。しかし、採血や輸液ラインの取り扱いでは半数弱、寝衣交換では3割強の学生が実施に自信を持っていないという結果であった。よって静脈内採血や注射の準備の演習を卒業前に行う意義はある。本学の卒業生への調査²⁾では寝衣交換は他項目と比較すると自信を持って実施できるほうに入る。しかし、看護学演習ⅡBでの寝衣交換は事例設定があり難易度が高いためか、到達度は静脈血採血や注射の準備と比較すると低い。卒業時における看護実践能力の経験到達状況に関する調査³⁾で到達レベルが低いのは看護の基本技術であり、病院の管理者への調査⁴⁾で就職時に高い達成度を求めているのは日常生活援助技術であるという報告がある。よって、寝衣交換の演習は必要と考える。以上より看護学演習ⅡBの演習項目は本学の学生にとって卒業時に達成度を高めておきたい項目であり、継続していく必要性がうかがえた。

自由記載からは「もっと練習したい」という声が多数聞かれた。川嶋⁵⁾らは看護基本技術の習得への事前学習や事後学習の効果をあげ、練習を繰り返さねば技術が衰えてしまうと指摘している。看護技術は繰り返し練習することで習熟できるといわれており、学生が繰り返し行えるような環境の整備が今後の課題であろう。

VI. 結 論

- (1) 「静脈血採血法」「注射の準備」「輸液をしている臥床患者の寝衣交換」演習の意義や卒業後の有用性については90%以上の学生が感じ、「演習した内容は教員の監督下でできるようになった」と70%の学生が回答し、「演習した内容を今後実施するのに自信がついた」と回答した学生は60%を超えていた。
- (2) 演習の方法では、過去の学習との関連、難易度、デモンストレーションの長さや方法、教員の指導のタイミングや説明方法は70%以上の学生が適切であったと感じていた。
- (3) 一部の学生から練習時間の確保や教員の指導方法の統一の希望があり、今後も練習時間の確保の継続および、教員の指導方法の向上が求められる。

引用文献

- 1) 厚生労働省：看護基礎教育における技術教育の在り方に関する検討会，2003.
- 2) 愛知県立看護大学現行カリキュラム看護実践能力向上プロジェクトチーム：平成20年度魅力あふれる大学づくり事業報告書，看護実践能力向上のための学内における技術教育と臨床現場への適応支援プログラムの開発と評価，28-45，2008.
- 3) 雀部蘭美，眞鍋えみ子，藤田淳子，小松光代，三橋美和，馬場口喜子，西田直子，中川雅子，福本恵，岡本寧子：看護学士課程卒業時における看護実践能力の経験到達状況，京都府立医科大学看護学科紀要，18，55-63，2009.
- 4) 愛知県立看護大学現行カリキュラム看護実践能力向上プロジェクトチーム：平成19年度魅力あふれる大学づくり事業報告書，看護実践能力向上のための学内における技術教育と臨床現場への適応支援プログラムの開発と評価，75-76，2007.
- 5) 川嶋麻子，野田多恵子，丹佳子，井上真奈美，田中愛子：基礎看護学領域における看護実践能力の育成に向けた演習の試みと課題，山口県立大学看護学部紀要，9，57-65，2005.